

第一問 解答例

問1 人間が野生動物に擬態し、その所作を踊りとして模倣するという儀礼や芸能によって、人間が自然の世界に入り込み、自然に内在する力を文化の世界に組み込んでいこうとすること。

問2 旧石器時代の人類は、洞窟に自分の内臓感覚を外化し、その壁面に野生動物を模写することで、自然の一部としての自己を確認し、自分が生命体であるという記憶を刻印したということ。

問3 海の民が星の配置を読んで船を操縦する自らの方向感覚に投影したり、西欧の人々が天体を読んで自らの身体や世界を類推したりしたように、星の配置や運行を人間の身体に写しとること。

問4 原初の人類が野生動物の所作を模倣した舞踏を生んだように、模倣は人間文化における創造性の根源だが、これと同じことは人間個体の成長過程にも見られ、子供が人や動物やものを自在に模倣する遊戯が創造行為の準備段階になっているということ。

問5 人や動物の音声を真似る擬声語、人やものの動きを写す擬態語、あるいは主に手で書かれる文字のなかに残っている、模倣的な肉体的・物質性的こと。

問6 内臓や星や舞踏を読むことにはじまり、感性的・身体的な模倣を繰り返すことで創造されてきた人間文化の帰結の一つが文字だが、現代のデジタル化した社会では、文字を手で書くという模倣的な肉体的・物質性や感覚的悦びが失われつつあるから。

第二問 解答例

問1 ①Ⅱたいそうあきれるほど

②Ⅱ福足君に教え申し上げるうちに

③Ⅱ我慢できず

問2 下二段動詞「かる」未然形＋尊敬の助動詞「さす」連用形＋尊敬の四段補助動詞「たまふ」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋過去の原因推量の助動詞「けむ」連体形

問3 福足君に東三条殿のお祝いの舞を舞わせようとしたが、当日に舞台の上で舞うことを嫌がり、かんしゃくを起こして髪や衣装を乱したことが原因で、父の栗田殿が茫然自失の状態になった。

問4 始末に負えないほど駄々をこねる福足君のことだから、お祝い当日に何かとんでもない問題を起こすだろうと思っていたことだよ。

問5 アⅡ父の栗田殿はいうまでもなく、他人でさえ、ただただむしように感動し申し上げた。

イⅡ中関白殿の、福足君を自分の腰のあたりに引きつけて一緒に舞わせて、福足君の恥も目立たなくし、かえって当日の興趣も格別のものにした、思いやりがあり、機転が利いた態度。

問6 『栄花物語』が編年体で書かれ、道長賛美を中心に行っているのに対し、『大鏡』は紀伝体で、批判も交えて客観的に記述されている。

第三問 解答例

問1 ① 一刻も早く

② 類くない

問2 A 安泰な生活を送らせよう

B たとえ殺されたとしてもこの土地以外へは行くつもりはない

C 老婆よ、後で後悔するなよ

問3 先祖代々の家が偶然兵舎の造営予定地に建っていたことで、立ち退く代わりによりよい代替地と家を付与され、息子には職業、老婆には二人扶持を保證するという好条件が示されたから。

問4 老婆にとっては、他の土地を与えられ今より恵まれた暮らしをすることよりも、たとえ貧乏でも大事な先祖代々の土地での生活を続けるほうが価値があるということ。

問5 老婆が、好条件を示した奉行人に対し、お上の都合で自分を言いくるめようとしていると憤慨し、決してこの土地を離れるつもりはないと、地団太を踏んでべそをかきながら頑強に抵抗した言動。

問6 老婆はお上の示した好条件を拒否した頑固な愚か者ではあるが、縄張りに伴って田畑が荒らされることを嘆く気持ちは同情に値するもつともなことであり、そこには、まだ実らない稲が倒されても花を咲かせるような強さも持ち合わせていると、農民出身の作者の視点で評価している。

第四問 解答例

問1 (1) || そのひとあげてかぞふべからず⁽⁵⁾
(2) || 著書之士

問2 (1) || 方_下其用心与_レ力之_上劳

(2) || 書物を書く人が著述に対して精神と体力を尽くす苦勞に比べると

問3 言語による表現が不朽の存在であると頼りにできないことは、草木・鳥獣・人々のすべてがいずれ消滅することと同じ道理であるということ。

問4 古代の聖人と賢者の著作が不朽だと敬意を払わない者はいないが

問5 文を書く人が生涯をかけ心血を注いだ文章のほとんどが、後世消滅する運命にあるので。(40字)

問6 a || より b || またなんぞ c || つひに⁽⁵⁾

問7 (イ)・(エ)・(ク)